

誇りと文化を未来に

園長 児嶋 草次郎

10 月に入り朝夕涼しく、過ごしやすくなっています。9 月中に播いた秋野菜も順調に育っています。11 月 23 日の収穫感謝祭の日に、今年は希望者に収穫体験をしていただくという気持ちもあり、例年よりは少し多く播種していく予定です。大根、人参、キャベツ、白菜、これからお天道様が日々元気に大地を照らしてくだされば、元気に育ってくれることでしょう。

夏の終わりころから、常に収穫感謝祭を意識するようになって来ています。この気持ちがお祭りの原型であろうと感じます。日本の古い村で、それぞれに発生したお祭りは、お百姓さん方を鼓舞する目標でもあったのだらうと思い始めています。つまりお祭りは結果として存在したのではなく、目標として存在したのだらうという実感です。

大都会の価値観が各行政の価値観となり、人間が自然から遊離し、行政主体でお祭りが設定されるようになり、この大自然への感謝もどこかへ忘れられていったのではないかな。

さて、収穫感謝祭の日を開館とする「石井記念友愛社資料室」も、順調に展示が進んでいまして、90%くらいは形ができて来たと言ってもよいかもしれません。昔の写真や書類を漁っていて、新たな発見もあり、また新たな発想も生まれて来ています。「友愛通信」の前号で 2、3 点あげさせていただきましたが、今回も引き続きを書かせていただきます。

①まず再確認ですが、この資料室は、第一にここに来ることになった子供たちのために存在します。挫折し将来の夢も希望も失った子供たちが、今以上にもっともっと厳しい運命と生活の中でがんばった先輩たちの姿を感じ取り、人間として本能的に生存意欲を取りもどす、そのような空間になればと願うのです。その魂は響き合い、自分もそのつながりを自覚できれば、立ちあがろうとする生存本能が目覚めると思うのです。児嶋虬一郎の詩の中から、次のような言葉もドアの内側に掲げさせていただきました。

「わが子らよ わがひこばえ わがかがみ わがさだめ わが子らよ わがすくい わが光 我が生命 われをつぐもの」(一部補記)

石井十次の「一人ひとりが石井となって働いて」という願いと一緒にではないかと感じます。ここには魂と魂とをつなごうとする気が流れている、そう解釈したいと思います。

②昭和 20 年に石井記念友愛社を立ち上げる際の最大の功労者は柿原政一郎氏です。その時は財団法人として申請するわけですが、その設立者は柿原政一郎氏となっています。柿原氏が父児嶋虬一郎に委託する形で事業は始まっているのです。父虬一郎を柿原氏がどう説得したのか、ここがナゾです。柿原氏からの説得の手紙等が出て来ないか、捜してみましたが、今のところ不明です。

父は、大学を卒業するとすぐに招集され、満州国ハイラル第四国境守備隊へ入隊。あのノモンハンでソ連に大敗して、かろうじて生還。除隊は昭和 17 年 6 月。昭和 17 年 8 月には新潟県長岡市日本重工業株式会社に入社します。おそらく大原総一郎氏が社長をつとめる倉敷紡績株式会社の関連企業だと思うのですが、次の年昭和 18 年 8 月には、「社長の命によって」倉敷紡績の本店に移ります。今回

「倉敷紡績株式会社本店庶務課」と印刷された名刺も出て来ました。前社長大原孫三郎氏の伝記編纂に従事することになったようです。結婚は昭和 19 年 4 月 11 日（婚姻届出は昭和 21 年 7 月 9 日）、財津家の長女登美と、柿原政一郎氏の仲立ちでした。この昭和 19 年 4 月の給料（125 円ヲ給ス）表も出て来ています。そして、昭和 19 年 8 月に再び召集があり岡山連隊に配属され、アメリカ軍上陸に備えて宮崎高鍋にやって来るのです。石井十次のお導きとしか言いようがありません。

ここで注目すべきは、戦争が終って帰るべきところは「倉敷紡績株式会社」だったということ。そこで、石井記念友愛社を立ち上げるにおいて第二の功労者は倉紡の社長大原総一郎氏だと今回思うようになりました。大原氏の了解あつての柿原氏の説得でしょう。大原氏からは、その後もルノアールの「ココの像」、「石井十次銅像」など寄付していただいたり、陰で様々な支援を受けたようです。

③今まで私は、父の時代は守りの時代、私の時代は攻めの時代と、勝手に決めつけていた面があり、今回資料を整理するにおいて、反省させられています。

戦後、昭和 20 年からスタートして約 10 年で、職員家族と同居する家庭的な寮（館）が 6 つ（合わせて入所児童 100 名以上）も点在する、茶臼原孤児院時代に勝るとも劣らない一大施設となります。しかし、ここで自己満足する児嶋琥一郎ではありませんでした。

昭和 30 年 10 月に都城市長等に合い、土地探しを始めるのです。当時県南に施設がなく、出身地と同一の環境地で生活させてあげたいという願いからです。今回初めてそれを報じる新聞記事に出会ったのですが、私たちが「神武の家」を作った時の理由と一緒です。そして、昭和 32 年 1 月 1 日に石井記念有隣園スタートしています。

それから、昭和 31 年 4 月より「石井十次日誌」の出版に着手した事実も重要です。これは児嶋琥一郎個人の孤独で地道な長期戦となります。28 年かけて、日誌 31 巻、資料 2 巻を 500 部ずつ発行し、全国の主要図書館、教会、施設等に寄贈で送り続けたのです。現在、石井記念友愛社では、「石井十次資料館研究紀要」（今年は第 27 号）を発行し、全国の図書館等（120 以上）に送り続けています。石井十次日誌の発送先の名簿が今のところ出て来ていませんが、200 部としても大変なことです。この斬新（ざんしん）さに今回気づかされました。活字化して出版するという作業も大変なことです。それを全国に寄贈で送り届けるという挑戦もすごいことです。つまり、石井十次研究の“種まき”をしたのです。

その後、「石井十次資料館」（昭和 54 年）もできますが、その結果として石井十次研究が飛躍的に進むことになったと理解しなければなりません。

昭和 35 年に地域の苦闘する開拓地に「二本松母の家」（隣保事業）を作ったり、昭和 42 年に石井記念奨学金を作ったり、石井記念ひかり保育園や（昭和 29 年設立）やのゆり保育園（昭和 33 年設立）はもちろんですが、この茶臼原大地の開拓者の方々への支援もしっかり行っています。奨学金事業では、地域の高校生数名がこの奨学金で短大や専門学校で保育士の資格を取り、友愛社で働き、保育園の園長になった人もいます。

国際的な活動で言えば、昭和 52 年から開設した日本赤十字の委託を受けたベトナム難民支援事業も重要です。昭和 52 年 8 月に新聞紙上で施設提供の呼びかけがあるとすぐに反応するところは、さすがだと思います。頭の中ではすでに構想していたのでしょう。

「過去に外国人の人に受けた恩を少しでも返したい」というのが受け入れる動機でした。

他にも同じ昭和 52 年には、国際精神里親運動（現在名はチャイルドファンドのスポンサーシップ・プログラム）にも賛同し加入。現在も 8 名分の生活支援をしています。このチャイルドファンドが対象とする国は、フィリピン、ネパール、スリランカ等です。

こういう堀一郎時代の歴史をしっかりと認識すると、自分が恥ずかしくなります。当時の事業内容を父より聞く時間もなく、検証する余裕もなく時は流れました。この「友愛社資料室」が若い職員たちへの文化と歴史の伝承の場になればと願います。

③私は、この石井記念友愛社内生まれ育った人間です。昭和 20 年代の写真の中にも、園児と一緒に私の幼い少年の姿が写っています。その当時の遊び相手は、同年代の園児でしたし、年長の園児からは随分かわいがってもらいました。牛の放牧場でソフトボールをしたり、川に魚釣りに行ったり、山の木々に登ってアケビを取ったり、様々な自然との交流が私の人格を作り出したし、懐かしい思い出として蘇って来ます。

これは園児だった方々も一緒だと思います。自らのアイデンティティを形づくったこの大自然と共生し、共同生活で切磋琢磨し合った体験を、誇りとしたいという思いは誰にでもあるでしょう。その思いを裏切らないように、伝統と文化と自然を守っていくのが、今ここで働いている職員と子供たちの責任でもあるでしょう。そういう意味でも、その歴史と文化を知る場は必要ですし、この「資料室」がその一つになってくれると思います。

④この作業をしながら考えることは、この歴史と文化をどう未来へつないでいくかということ。この場がそういう空間になるとは思っても、導き説明できる人間がいなければなりません。

9 月 23 日(水)の「明倫塾」の時には、論語の素読を早く切り上げ、出席した中・高生をこの「資料室」へ案内し私から簡単に説明をしました。そして、このように話しました。

「みんなは自分のことしか考えてないと思うけど、こうして 80 年の歴史をみると、心がずっとつながって来ているということを発見する。卒園生たちが後輩のことを思って手紙を書いたりしている。これが大事で、こうしてそれらを展示してみると、一つの心のつながりが生まれる。みんなもやがてここを出て行くけど後輩たちがまたここで生活していく。後輩たちのことを考える先輩になってほしい。

新しい子が入所して来た時、みんな一人ひとりが、ここにその子を連れて来て、説明が出来るようになってほしい」。

今後の一番の課題は、この歴史と文化の価値観を共有できる職員を、どのようにして今後確保していくかということです。私はここで育っていますので、大学卒業時父から、「北海道家庭学校」で 1 年修行して来いと言われた時、抵抗なく行くことができました。しかし、今の時代、法律とマニュアルと資格で福祉が成り立つ、子どもは育つと思いこんでいる専門家や政治家が多い中で、伝統的子育ての価値観の必要性を理解できる人材を得ることは非常にむづかしくなっています。しかし、私は本物の子育て支援をしようと思っている若者は、全国に必ずいると信じています。問題は、そういう志を持っている若者たちに、こちらの情報をどう送り届けるのかということ。インターネットのホームページや SNS の使い方を専門家をまじえて研究し、発信力をもっとつけていかねばなりません。

友愛社資料室は、石井十次資料館とは随分趣の違うものになりそうです。一般社会に向けた時、この資料室はどのような価値があるのか。石井十次資料館は児童福祉を勉強しようとする時、その原点として、理念や方法論を学ぶ場としてなくてはならないものでしょう。

では、友愛社資料室はどうか。グローバリゼーションが世界の歴史や文化を蝕んでしまう世の中になってしまったからこそ、子供たちが自分たちの運命を変えるために奮闘して来た生活の場の歴史と文化をアピールしていくことは、日本の歴史と文化を守ることにもつながることになるのではないかと、私はそのように考えています。